

Franz Liszt のオルガン音楽

—コラールに基づく作品を通しての一考察—

小林 みゆき

はじめに

Franz Liszt (1811-1886) のオルガン音楽といえば、ピアニスティックな演奏技術を駆使した大オルガンのためのシンフォニックな作品として、彼のピアノ作品同様に聴衆を魅了する華麗な部分が強調されることが少なくない。大規模なオルガン音楽の開拓は、彼の後に続くドイツの Max Reger (1873-1916) やフランスの César Franck (1822-1890)、Louis Vierne (1870-1937) などのオルガン音楽に影響を与えている。しかし、2大作品であるコラール „Ad nos, ad salutarem undam” による幻想曲とフーガ [マイアベーアのオペラ《預言者》から] と BACH の主題による前奏曲とフーガ以外の作品は、あまり知られておらず、演奏される機会も少ない。F. リストのオルガン作品は、ある時期から華麗でシンフォニックな作品というよりも、より宗教音楽としての性格を強めてゆく。F. リストは、オルガン作品として幾つかのコラール編曲も残している。コラール編曲を含め、過去の偉大な作曲家たちの作品を編曲することで、録音技術のなかった時代に多くの人々に重要な過去の作品を紹介するという役割を担っていた。その中には、J.S.Bach (1685-1750) のカンタータに起用されたコラールに基づく編曲がいくつかあり、その創作は晩年にまで及んでいる。そこには、F. リストの J.S. バッハに対する畏敬の念がよく表れている。それらのコラールの内容を知ることによって、F. リストのオルガン音楽に込めた想いをより深く理解し演奏することが可能になるのではないかと考えた次第である。この論文では、いくつかのコラールの内容を示して、F. リストがオルガン音楽を通

して表出しているものについての一考察を試みるものである。

1. F. リストとオルガンの出会い

F. リストは、1811 年 10 月 22 日にハンガリーのライディングに生まれた。彼の家系はドイツ系で当時の公用語がドイツ語であったこともあり、ドイツ語を母国語として育った。L.v.Beethoven (1770-1827) の弟子であるオーストリアのピアニスト Karl Czerny (1791-1857) にピアノを学び、11 歳でコンサートピアニストとしてデビューした。当時ヨーロッパで最も偉大なピアニストとして有名になり、さかんに演奏と作曲活動を行い続けたが、1848 年 (37 歳) ヴァイマルの宮廷楽長に就任したのを機に、主に作曲や弟子の育成と音楽芸術の普及活動に打ち込むようになった。そのヴァイマル時代に出会ったロマン派オルガンと教会音楽家たちとの交流が、F. リストに新しいロマン派オルガン音楽を生み出すきっかけを与えた。18 世紀の中ごろからオルガン建造は、バロックオルガンの理想から少しずつ遠ざかっていった。教会では、オーケストラ音楽の応用が一般的に普及するようになり、古典派音楽よりもより豊かな響きが求められるようになった。そこで登場したのが多くのレジスターを持つ大オルガンであった。パイプの数はもとより送風機構や鍵盤のもどりの速さなどを改良した後期ロマン派音楽に適したオルガンの建造が盛んになった。そのようなときに、1853 年から 1855 年にかけて、北ドイツの優れたオルガン建造家 Friedrich Ladegast (1818-1905) によって大オルガンが Merseburg 大聖堂に建立された。その楽器は、

81 のストップと 4 段鍵盤とペダル鍵盤を持っていた。当時ドイツで最大のオルガンであった。F. リストは、その大オルガンの落成式に BACH の主題による前奏曲とフーガを披露しようとして予定していたが間に合わず、1850 年に完成していた „Ad nos, ad salutarem undam“ による幻想曲とフーガ [マイアペーアのオペラ《預言者》から] が上演された。BACH の主題による前奏曲とフーガは 1856 年に初演となった。その両方のオルガン演奏を担ったのが、Merseburg 大聖堂オルガニスト Alexander Winterberger (1834-1914) であった。F. リストのオルガン作品の理想的な音色と響きをもたらすレジストレーションの選択や演奏に携わり、その卓越した足鍵盤も含めた演奏技術で演奏会を大成功に導いた。ヴァイマールに来るまで、F. リストは偉大なピアニストであったが、オルガン奏者としてはペダル演奏技術が不足しているために完成に至らなかったのである。それゆえに、彼はヴァイマールでは集中的にオルガン演奏に取り組んでいる。A. Winterberger は、F. リストの最初のオルガンの弟子となった。二人目の演奏技術に優れた弟子は、ピアニスト出身の Julius Reupke (1834-1858) である。19 世紀の優れたオルガン作品の一つである „Der 94. Psalm (Sonate)“ (1857) を残している。二人の若い非凡な巨匠達を通して、F. リストは「ピアノ演奏法を用いた新しいオルガン演奏法」と「現代的オーケストラ風のレジストレーションの方法」を次世代のオルガニスト達に伝授したいと願った。そのために新しいオルガン学校を創設しようとしたが、A. Winterberger の退職と J. Reupke が結核で若くして亡くなったことであきらめざるを得ない状況に陥った。それゆえに、後に彼のオルガン作品における巨匠しか演奏することができない部分を簡素化するという作業も行っている。学校創設の願いは、1875 年にハンガリー王立音楽院 (現在のリスト音楽院) となって成就し、次世代の音楽家たちとの交流と育成に貢献した。三人目にあげる弟子 Alexander Wilhelm Gottschalg (1827-1908) は、Tiefurt で 23 年間教師とカントールとして勤務

したが、上記の二人の弟子達のように卓越した演奏技術は持っていなかった。それでも最初は弟子として教育を受け、後には友人の一人となった。そして、19 世紀の F. リストも読者であったドイツ語の教会音楽雑誌の編集に携わり、F. リストのオルガン作品の清書や編曲そして出版にも大いに貢献している。多忙な F. リストにとって友人 A. W. Gottschalg の存在はかけがえのないものであった。そのような友好的関係は、F. リストが亡くなるまで 30 年間にわたって途切れることなく続いた。また、A. W. Gottschalg が若い Max Reger を見出したことは、後世のオルガン音楽に多くの貢献をもたらした。F. リストは、Merseburg 大聖堂の大オルガンをはじめ、ヴァイマールの宮廷楽長として中部ドイツの多くの名匠によるオルガンに関わり、フランスのパリではオルガン建造家 Aristide Cavallé-Coll (1811-1899) の色彩豊かなオルガンも演奏している。一方、1854 年からはダブル楽器にも興味を持ち始め、Altenburg の音楽サロンに収められている Alexandre & Fils 製の Piano-Orgue (ペダル鍵盤付き) で多くの作品を演奏した。Villa d'Este では、同会社の 1864/65 年に製造された Klavier-Harmonium を使用し、彼の後期の作品が生まれている。リストは、多角的にオルガンという楽器に興味を示したが、晩年のオルガン作品においては、どのような楽器で演奏されるべきであるかの重要性は次第に失われていった。

2. F. リストとヴァイマールの教会音楽家達との交流

F. リストは、ヴァイマールの宮廷楽長として大公のオーケストラ学校設立やオルガン改造などを通して一部のプロテスタント教会音楽家たちとコンタクトを持った。上記の A. Gottschalg をはじめ、Johann Gottlob Töpfer (1791-1870)、Christoph Bernhard Sulze (1829-1889)、Karl Müllerhartung (1834-1908) などである。1850 年にはバッハ協会が設立され、F. リストも理事となっている。プロテス

タント教会 Stadtkirche のオルガニスト、作曲家、オルガン建造学者である J.G.Töpfer は、優れたバッハ演奏と即興演奏で有名であった。彼は Paulinzella のオルガン建造家 Johann Friedrich Schulze (1793-1858) と共に Stadtkirche のオルガン改造 (1823/24) を行った。新しい数学的物理学の原理に裏付けられたオルガン建造学の本 „Die Orgel“ を 1843 年に出版している。1830 年に市のオルガニストに任命され、数多くのコラール編曲においては、テキストの領域への情緒的介入に成功している。それは、後に Max Reger によってより拡大された。F. リストは、J.G.Töpfer の知識と能力に尊敬の念を抱いたことを 1873 年に A.Gottschalch宛てに手紙で述べている⁽¹⁾。F. リストと J.G.Töpfer は、相互に影響を与えあう関係であった⁽²⁾。Stadtkirche では、F. リストの 18 Psalm(1861 年)や娘 Cosima と Richard Wagner (1813-1883) の列席のもとでオラトリオ「キリスト」(1873 年)が作曲者自身の指揮で上演されている。1860 年に F. リストは J.G.Töpfer に J.S. バッハのカンタータの最終合唱部分であるコラール „Ich hatte viel Bekümmernis“ (BWV21) とカンタータ „Aus tiefer Not schrei ich zu dir“ (BWV38) の導入合唱部分であるコラールのオルガン編曲を献呈している。Johann Friedrich Schulze (1793-1858) は、Stadtkirche における J.G.Töpfer の後任オルガニストで、1875 年には大公のオーケストラ学校の作曲法の教師として招聘された。彼は、F. リストの 200 の作品を編曲した。Karl Müllerhartung は、指揮者、作曲家、音楽教育者であった。多くの F. リストの作品を演奏した。このように、F. リストの教会音楽家達との交流は、彼のオルガン音楽の誕生に大きな影響と刺激を与えた。

3. J.S. バッハに対する尊敬の念

オルガン作品「BACH の主題による前奏曲とフーガ」をはじめ、J.S. バッハ作品の編曲をし、彼の演奏会でも J.S. バッハの作品を何度も演奏している。バッハ作品の編曲には、1840

年の始め頃からすでに取り掛かっていた。F. リストは、歴史主義の破壊を推進すると同時に、過去の優れた作品を正しく保護し後世に伝えてゆくことにも力を注いでいたのである。特に J.S. バッハの作曲技法である対位法(フーガの技法)に対しては、Robert Schumann (1810-1856) や Johannes Brahms (1833-1897) と同様に強い関心を示していた。1850 年にプロテスタントとカトリックを越えて設立されたバッハ協会設立の際には、理事となった。また、1884 年アイゼナハに建てられたバッハ生誕 200 周年記念碑には、3000 ターラーを寄付している。1708 年から 9 年間ヴァイマルの宮廷楽長として活躍した J.S. バッハに対して、1848 年に同じヴァイマルの宮廷楽長となった F. リストが深い尊敬の念を抱いていたことは明白である。

4. コラールに基づく作品について

コラール „Ad nos, ad salutarem undam“ による幻想曲とフーガ[マイアベーアのオペラ《預言者》から]と BACH の主題による前奏曲とフーガの後に続くオルガン作品は、J.G.Töpfer に献呈されたコラール編曲 „Aus tiefer Not schrei ich zu dir“ である。1869 年に初版が出ているが、1860 年の作品と推定されている⁽³⁾。F. リストは、マリー・ダグー伯爵夫人との間に三人の子供を儲けたが、1859 年 12 月にベルリンで長男ダニエルが 20 歳の若さで病死した。その後、F. リストは 1860 年に遺書をしたためている。1861 年から 20 年間、F. リストの創作活動は宗教音楽が中心になった。1861 年にはヴァイマルを去りローマに着くが、長い間切望していたカロリーヌ・ヴィトゲンシュタイン侯爵夫人との結婚も外部の事情で破断になっている。このようなときに起用されたコラールの内容は、次の通りである。宗教改革者 Martin Luther (1483-1546) が 1524 年に旧約聖書の詩編 130 編(悔い改めの詩編)に基づいて作ったプロテスタント最初のコラールである。ルターは信仰の姿勢と音楽について次のように示している。

悔い改めるとは信仰者の全生涯が悔い改めの連続であること⁽⁴⁾

音楽は神のことに次いで賞賛に値するものである。音楽は、人間の心の動きの主人であり、支配者である。人間はこれに支配され、しばしば心奪われもする。悲しんでいる人を慰め、幸せな人を恐れさせ、絶望している人を奮い立たせ、高ぶっている人を低め、心燃えている人を静め、憎しみをもっている人を宥めたりするのに、音楽以上に有効なものを見出すことができない⁽⁵⁾。

カトリックのミサではグレゴリオ聖歌（ラテン語）が聖職者によって歌われていたが、プロテスタント教会の礼拝ではグレゴリオ聖歌に代わるコラール（ドイツ語の讚美歌）が会衆によって歌われるようになったのである。J.S. バッハのカンタータ第 38 番では、最初と最後にこのコラールが合唱によって歌われる。

ドイツ語の歌詞は次の通りである。

„Aus tiefer Not schrei ich zu dir,“

Aus tiefer Not schrei ich zu dir, Herr Gott, er-
hör mein Rufen.

dein gnädig'Ohren kehr zu mir und meiner
Bitt sie öffne ;
denn so du willst das sehen an, was Sünd und
Unrecht ist getan,
wer kann,Herr,vor dir bleiben?

Bei dir gilt nichts denn Gnad und Gunst,die
Sünde zur vergeben ;
es ist doch unser Tun umsonst auch in dem
besten Leben.

Vor dir niemand sich rühmen kann,
des muß dich fürchten jedermann und deiner
Gnade leben.

Darum auf Gott will hoffen ich, auf mein Ver-
dienst nicht bauen ;
auf ihn mein Herz soll lassen sich und seiner
Güte trauen,
die mir zusagt sein wertes Wort ; das ist mein
Trost und treuer Hort,
des will ich alzeit harren.

Und ob es währt bis in die Nacht und wieder
an den Morgen,
doch soll mein Herz an Gottes Macht verzwe-
ifeln nicht noch sorgen.
So tu Israel rechter Art, der aus dem Geist
erzeuget ward,
und seines Gottes erharre.

Ob bei uns ist der Sünden viel, bei Gott ist
viel mehr Gnade ;
sein Hand zu helfen hat kein Ziel, wie groß
auch sei der Schade.
Er ist allein der gute Hirt, der Israel erlösen
wird
aus seinen Sünden allen.

日本語の歌詞は次の通りである。

「深き悩みより」

深き悩みより われはみ名を呼ぶ。
主よ、この叫びを 聞き取りたまえや。
されど、わが罪は きよきみころに
いかで耐え得べき。

世にある人々 力の限りに
主の道を求め いそしみ励めど
神のみ恵に ふさわしき者は
ただ一人もなし。

おのれの業には 少しも頼らず、
おのれの力に 救いを求めず、
疑うことなく 神のみ言葉に
望みをおくのみ

朝を待ち望む 見張りにもまして
われはひたすらに 神を待ち望む。
疑いの闇は いかにも深くとも
み力 現れん。

われらの罪をも すべてつつみたもう
主のいつくしみは 豊かにあふれて、
み民のそむきを あがなう牧者の
恵みはつきせじ⁽⁶⁾。

歌詞に関連する聖書箇所
詩編 130 編
出エジプト記 3 章 7-10 節
ヨナ書 2 章 3 節
ローマの信徒への手紙 3 章 22-24 節

1862年7月には、長女ブランディーンがF. リストの初孫ダニエルを出産。しかし、産後の肥立ちが悪く同年9月に亡くなった。その二ヶ月後にピアノ作品 „Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen“ 「泣き、嘆き、憂い、おののき」と「口短調ミサのクルチフィクス」の動機に基づく変奏曲 [J.S. バッハの教会カンタータ第12番第2曲のオスティナート・バスによる] を作曲している。1863年には、同じタイトルでオルガン作品を作曲。

F. リストは叔父のエドゥアルド・リストに次のような手紙を書いている。

ブランディーンは私の心のなかでダニエルのかたわらにいます。ふたりは私のそばにとどまりながら、贖罪と浄化をもたらし、代願者として『心を高めよ! Sursum corda!』と叫んでいるのです。死の時間が近づいても、私とその心構えをしていなかったり、臆病であったりすることはないでしょう。われわれの信仰は、それが導いてくれる救済を期待し、待ち望んでいます。しかし、この世にいるかぎり、われわれは日々の仕事に立ち向かわねばなりません。私は創造的であるつもりです。他人にはそれは

取るに足らないことかもしれませんが、私にはどうしても必要なことなのです。……生きている愛しき人々を光で照らし、亡くなった愛しき人々を『精神的にも肉体的にも』安らかに眠れるようにしなくてはなりません。これこそ私の芸術が求めるものであり、目的なのです⁽⁷⁾。

J.S. バッハのカンタータ第12番 BWV12は、彼がヴァイマル宮廷楽長になって間もなく復活祭後第3主日に初演されたもので、歌詞台本は Salomon Frank (推定) によるものとされている⁽⁸⁾。

次に第2曲の歌詞と対訳を示す。

Weinenn, Klagen, Sorgen, Zagen,
Angst und Not
Sind der Christen Tränenbrot,
Die das Zeichen Jesu tragen.

日本語の歌詞は次の通りである。

泣く、嘆く、案ずる、恐れる。
恐怖と苦しみがキリスト者の涙の糧、
それらすべてをイエスは負ってください。

歌詞に関連する聖書箇所
ペトロの信徒への手紙一 2 章 11-20 節
ヨハネによる福音書 16 章 16-23 節

(日本語訳は小林みゆきによる意訳)

そして、第7曲(最終曲)のコラールに基づいたコラール編曲が、F. リストのオルガン作品では最後の部分に登場する。

ドイツ語の歌詞は次の通りである。第6節が引用されている。

„Was Gott tut, das ist wohlgetan“
Text: Samuel Rodigast 1675

Melodie: Severus Gastorius [1675]1679

Was Gott tut, das ist wohlgetan,
dabei will ich verbleiben.
Es mag mich auf die rauhe Bahn
Not, Tod und Elend treiben,
so wird Gott mich
ganz väterlich
in seinen Armen halten;
drum laß ich ihn nur walten.

日本語の歌詞は次の通りである。

「み神のみわざは」

神のみわざは すべて正しい。
み心のままに 従いゆこう。
悲しみと死との あらし吹いても
主は父のように、み腕に抱いて
私を守る⁽⁹⁾。

歌詞に関連する聖書箇所
ローマの信徒への手紙 8 章 28 節
コヘレトの言葉 3 章 11 節
詩編 92 編 2-3 節

ローマに移住した 1862 年には、彼の代表的宗教曲オラトリオ「キリスト」も完成させている⁽¹⁰⁾。その翌年にマドンナ・デル・ロザリオ修道院の一室に引っ越し、1865 年にはヴァチカンに住んで、神学などの修養をして下級聖職者となった。F. リストは、幼い頃からキリスト教に対する興味があり、神学校に入って聖職者になることを望んでいたが、その夢が 54 歳になってからようやく実現したのである。ここで、コラールに基づく作品ではないが、同年に書かれた「システイナ礼拝堂の喚起 [Gregorio Allegri (1582-1652) と W.A. Mozart (1756-1791) による]」と題したオルガン作品をあげておく。システイナ礼拝堂で聖週間にものみ演奏される門外不出の声楽作品 G. アッレグリの「ミゼレレ・メイ・デウス (神よ私をあわれんでください)」に感

動する W.A. モーツァルトを喚起して生まれた作品である。「ミゼレレ・メイ・デウス」の歌詞は、詩編 51 編(3 節—21 節)に基づいている。冒頭の 3 節と 4 節のみをあげておく。

神よ、わたしを憐れんでください
御慈しみをもって。
深い御憐れみをもって
背きの罪をぬぐってください。
わたしの咎をことごとく洗い
罪から清めてください。

(聖書 新共同訳 日本聖書協会 詩編 51 編)

聖職者となった F. リストの音楽創造の根底にあった考え方は、次のような手紙に示されている。

音楽は本質的に宗教であり、『生まれながらのキリスト教徒』の魂のごときのものであるといえるでしょう。言葉と音楽は結びついているのですから、音楽が神への賛美を歌い、有限と無限というふたつの世界の交わりに仕える以上に、音楽にふさわしい役割があるのでしょうか。そうした特権は音楽のものであります。なぜならば、音楽は双方の性質をあわせもっているからです (1865 年 5 月 20 日 F. リストの書簡)⁽¹¹⁾。

私の考えによれば、音楽が祈りを内包するとき、音楽は教会において、その完全な正当性をもつに至るのです (1855 年シトフスキー枢機卿に宛てた F. リストの書簡)⁽¹²⁾。

1866 年には、彼の子どもたちを育ててくれた母親が亡くなった。同年、J.S. バッハのカンタータ第 21 番による導入とフーガ Einleitung und aus der Kantate, „Ich hatte viel Bekümmernis“ を作曲して J.G. Töpfer に献呈している。このタイトルは、J.S. バッハのカンタータ第 21 番の第 2 曲合唱の歌詞に基づいている。カンタータ第 21 番は、三位一体後第 3 主日に演奏され

たJ.S. バッハ初期の大作の一つとされている。歌詞は作者不明 (?Salomon Frank)¹³⁾であるが、内容は次のように述べられている。

三位一体後第3主日の福音書章句は「失われた羊のたとえ」を中心とし、「99人の正しい人よりも悔い改める1人の罪人に、天の喜びがある」ことを述べている。これは、徴税人や罪人と交わったイエスが、ファリサイ人や律法学者たちの差別意識をたしなめた言葉である。S. フランク作と推定される台本は、この罪人の視点に立ち、現世の悲嘆をなめ尽くした魂が絶望の淵でイエスの光を見て癒され、喜びのうちに神を讃えるまでを描く¹⁴⁾。

その第2曲のテキストは次の通りである。

„Ich hatte viel Bekümmernis in meinen Herzen;
aber deine Tröstungen erquickten meine Seele.“

日本語訳は次の通りである。

私の心の中に、多くの憂いがあった。
しかし、あなたは私の魂を慰め励ましてくださる。

歌詞に関連する聖書箇所
詩編94編19節

(日本語訳は小林みゆきによる意訳)

そして、冒頭から導入されているのは、J.S. バッハのカンタータ第21番の第2部最後の合唱部分(第11曲)の歌詞である。歌詞は次の通りである。

Dass Lamm, das erwürget ist,
ist würdig zu nehmen Kraft und Reichtum
und Weisheit und Stärke und Ehre und Preis
und Lob.

Lob und Ehre und Preis und Gewalt sei unserm Gott
von Ewigkeit zu Ewigkeit. Amen, Alleluja!

日本語訳は次の通りである。

天使たちは大声でこう言った。
「屠られた子羊は、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。」

(聖書 新共同訳 日本聖書協会 ヨハネの黙示録5章12節)

讃美と誉れと賛美と力が私たちの神にあるように
永遠から永遠に。アーメン、アレルヤ!

(日本語訳は小林みゆきによる意訳)

1876年には、三人の子供の母親であるマリー・ダグー伯爵夫人がパリで亡くなった。1879年2月には、親友でもあった叔父エドゥアルドが死去。その五日後に、ヴェネツィアで娘婿のRichard Wagnerが客死した。

晩年の1883年には、コラール編曲 „Nun danket alle Gott“ をプロテスタント教会史家 Prof. Dr. Karl von Hase (1800-1890) に献呈している。

ドイツ語の歌詞は次の通りである。

„Nun danket alle Gott“
Text und Melodie :Martin Rinckart (um1630)
1636

Nun danket alle Gott mit Herzen, Mund und Händen,
der große Dinge tut an uns und allen Enden,
der uns von Mutterleib und Kindesbeinen an
unzählig viel zugut bis hierher hat getan.

Der ewigreiche Gott woll uns bei unserm Leben
ein immer fröhlich Herz und edlen Frieden geben
und uns in seiner Gnad erhalten fort und fort
und uns aus aller Not erlösen hier und dort.

Lob,Ehr und Preis sei Gott dem Vater und dem Sohne
und Gott dem Heiligen Geist im höchsten Himmelsthronen,
ihm,dem dreieingen Gott, wie es im Anfang war
und ist und bleiben wird so jetzt und immerdar.

日本語訳は次の通りである。

「感謝にみちて」

感謝にみちて み神をたたえん。
すべてささげ みわざをうたわん。
母の胎に ありし日より
あがないたもう 神の力。

わがいのちの すべての日々を
恵み祝し 平和をあたえ、
いかに深き 悩みすらも
あわれみもて いやしたまわん。

栄光と賛美 ささげて歌わん。
父なる神 み子と聖霊に、
昔いまし 今もいまし
永遠にいます ひとりの主に¹⁵⁾。

歌詞に関連する聖書箇所
詩編 22 編 10-11 節
エレミヤ書 1 章 5 節
マタイによる福音書 21 章 16 節
(シラ書 50 章 22-24 節)

ちなみに、コラールに基づく作品ではないが、

F. リストが亡くなる直前 (1886 年) に残したオルガン作品は、オルガンあるいはハルモニウムのための作品で、W.A.Mozart (1756-1791) が亡くなる年に作曲した宗教曲 (多声音楽) „Ave verum corpus“ K.618 「アヴェ・ヴェルム・コルプス」の旋律に基づく編曲である。「アヴェ・ヴェルム・コルプス」は、ラテン語によるローマ・カトリック教会のイムヌス (神を賛美する歌) のひとつである。

歌詞は次の通りである。

Ave,verum corpus,natum de Maria virgine.
Vere passum,immolatum in cruce pro homine.
Cujus latus perforatum unda fluxit et sanguine.
Esto nobis praegustatum in mortis examine.

上記の歌詞に関連した聖書の箇所をあげておく。

そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。
わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。

(聖書 新共同訳 日本聖書協会 ペトロの手紙一 2 章 24 節)

1827 年 16 歳の時に、自分をいつも見守り音楽家に育てあげてくれた父親を亡くし、その後多くの親しい人々の死に直面しながらも音楽創造に携わり続けた F. リストの支えとなったものについて考えさせられる。それは、「人間の苦しみは、神の無限の恵みによって癒し慰められる」という彼の信仰であったのではないだろうか。

F. リストは、標題音楽「交響詩」にも取り組んだ。交響詩とは管弦楽による叙事詩であると主張している。

叙事詩は、その時代と民族の精神を反映し

ているとリストは主張する。『叙事詩の目的は、主人公の行為の再現ではなく、彼の心の中の情緒の再現である』。そしてリストによれば、『音楽とは具体的に理解しやすい、感情の本質のあらわれ』であり、音楽こそが最高の詩の形式、真の言語である⁶⁶。

F. リストにとって、音楽そのものが感情の表現として存在していたことを考えれば、オルガン音楽においても彼の心の中の情緒の再現であると考えられる。F. リストの人生の節目に生み出されたいくつかのコラールに基づく作品（W.A.Mozartに関連した作品も含めて）を通して、彼の苦しみや悲しみが再現され、それらが無限の恵みによって癒し慰められることを祈る彼の心の中が見えてくる。

5. F. リストのオルガン作品の特徴と演奏法について

F. リストのオルガン作品の楽譜の特徴は、ピアノ作品の楽譜と同じように書かれている場合が多いことである⁶⁷。時折、ピアニスティックに明瞭に流れるようなパッセージが登場する。両方の楽器のために書かれているともいえる。そして、その記譜法は統一的ではない。スタッカート、テヌート、アクセント、デュナーミク等の記号がピアノ作品と同様に使用されている。スラーに関しては、二つのスラーが重なり合わせられていることがあり、つまり、二つ目のスラーを重ねることで大きなフレーズの線を表している。ピアノとは違うフレージングの記譜法への気配りがなされている。大きなスラーは例外的に現れる。1865年からは、オルガン作品記譜法がよりピアノ作品記譜法に近づいた。しかし、オルガンではピアノよりも最も正確で綿密なレガート奏法が求められ、スタッカートはよりポルタメントで演奏することが妥当であることはオルガンという楽器の特徴からして当然である。レジストレーションは、ヴァイマル時代の作品においては、主に Merseburg 大聖堂で F. リストと弟子 Winterberger の共同作業で行われた。幅の広い強弱法の要求

を満たすためにスウェルとエコー鍵盤の使用、アシスタントによる操作によって補われた。彼の大オルガンのための作品においては、Merseburg 大聖堂の音色が重要なインスピレーションの根拠となっている。後期の作品では、稀に足鍵盤の音色を指定する以外レジスターの指示はない。基本的なデュナーミクは、p が dolce で、pp が *dolcissimo* あるいは *cantabile* または *cantando* で示されている。卓越したピアニストであった F. リストのオルガン作品をどのように演奏するかについては、彼のオルガンとの出会いとオルガン音楽に対する考え方を理解することが重要であり、そこである程度方向づけられる。アコーギクに関しては、それぞれの聴衆が音楽をよく理解できるように、比類のない自然さと明瞭さで演奏されるための *Tempo rubato* の種類の使用が頻繁に行われている。F. リストのオルガン作品を演奏するためには、Felix Mendelssohn (1809-1847) や Johannes Brahms (1833-1897) のオルガン作品同様に、

作品に込められた作曲家の意図いわゆる内面性を深く理解し、さらにロマン派音楽特有の抑揚を豊かに表現することができる、オルガン独自の演奏技術とピアノ独自の演奏法を重ね合わせるができる演奏者の技量が求められる⁶⁸。

6. おわりに

幼い頃から卓越したピアニストとして活躍し、さらに作曲家、指揮者、音楽家たちとの交流、後進の音楽家たちの育成、文筆活動、教会音楽の改革への取り組み、聖職者としての生活など、F. リストの多方面にわたる活動には、驚愕するばかりである。1861年ローマに居を移して以降の彼のオルガン作品は、それ以前に作られた大オルガンのための作品に比べれば、より宗教的で地味な印象を受ける。それゆえに、演奏会で披露される機会が少ない。しかし、それらは芸術的に劣るものではなく、むしろ F. リストの内面を如実に表したものであり、題材と

なったコラール等の内容を理解することも含めて、彼のオルガン音楽全体を真に理解し受け入れるためには欠かすことができない意義深い作品群であると考えている。そして、オルガン演奏者は、レジストレーションの指示や楽器の指示が曖昧になっていても、F. リストのオルガン作品創造の過程をよく理解することによって、ある程度彼の意図する音楽像に迫ることができる。その結果、祈りの音楽として人々の心の中に届けられるのではないだろうか。

註

- (1) Martin Haselböck „Franz Liszt und die Orgel“ BandX/b Universal Edition UE17882b s.424 1.12-27
- (2) 同上 s.425 1.13-34
- (3) 福田弥著 作曲家人と作品『リスト』音楽之友社 2008年 s.37 1.3
- (4) 徳善義和著「ルターと賛美歌」日本キリスト教団出版局 2017年 s.27 1.10
- (5) 同上 s.208 1.8-12
- (6) 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌 21』日本キリスト教団出版局 160番
- (7) 福田弥著 作曲家人と作品『リスト』音楽之友社 2008年 s.118 1.14-s.119 1.4
- (8) 角倉一朗著 バッハ叢書【別巻2】「バッハ作品総目録」白水社 1997年 s.19 1.2
- (9) 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌 21』日本キリスト教団出版局 527番 1節と4節
- (10) 福田弥著 作曲家人と作品『リスト』音楽之友社 2008年 s.127 1.10
- (11) 同上 s.131 1.7-11
- (12) 同上 s.106 1.5-7
- (13) 角倉一朗著 バッハ叢書【別巻2】「バッハ作品総目録」白水社 1997年 s.31 1.15
- (14) 『バッハ全集』教会カンタータ [1] 小学館 1998年 s.252 右側 1.27-36
- (15) 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌 21』日本キリスト教団出版局 11番
- (16) 福田弥著 作曲家人と作品『リスト』音楽之友社 2008年 s.97 1.1-5
- (17) Martin Haselböck „Franz Liszt und die Orgel“ BandX/b Universal Edition UE17882b s.391 1.10-11
- (18) 小林みゆき著「J. Brahms のオルガン音楽—11 のコラール前奏曲 op.122 を中心にして (その2)—」盛岡大学紀要 第33号 2016年 s.23

参考文献・楽譜・CD

1. Michael Saffle „The Music of Franz Liszt“ Routledge 2018
2. Martin Haselböck „Franz Liszt und die Orgel“ BandX/b Universal Edition UE17882b
3. Franz Liszt Sämtliche Orgelwerke Band 2 UE 17884, Band 6 UE 17888, Band 7 UE 17889 Universal Edition
4. Franz Liszt Urtext „Präludium und Fuge über B-A-C-H für Orgel“ von Ernst-Günter Heinemann G.Henle Verlag 976
5. Franz Liszt Prelude and Fugue on the theme BACH FOR ORGAN Edited by ANTHONY NEWMAN G.SCHIRMER, Inc.
6. LISZT Sämtliche Orgelwerke II, Herausgegeben von Sándor Margittay EDITIO MUSICA BUDAPEST 1971
7. CD The Organ Encyclopedia Franz Liszt Work for Organ, Vol.1 and Vol.2 Naxosff
8. CD COMPLETE WORKS FOR ORGAN FRANZ LISZT JUBILEE EDITION 2011
9. „Evangelisches Gesangbuch“ Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Württemberg, Gesangbuchverlag Stuttgart GmbH, Stuttgart 1996
10. „Johann Sebastian Bach 389 Choralgesänge für vierstimmigen gemischten Chor“ herausgegeben von Bernhard Friedrich Richter Edition Breitkopf Nr.3765
11. „Chorgesangbuch Geistliche Gesänge für ein bis fünf Stimmen“ Bärenreiter BA680
12. 角倉一郎著 バッハ叢書【別巻2】『バッハ作品総目録』白水社 1997年
13. 『バッハ全集』教会カンタータ [1] 小学館 1996年
14. 『バッハ全集』教会カンタータ [2] 小学館 1997年
15. 徳善義和著『ルターと賛美歌』日本キリスト教団出版局 2017年
16. P. カヴァノー著 吉田幸弘訳『大作曲家の信仰と音楽』教文館 2010年
17. 福田弥著 作曲家人と作品『リスト』音楽之友社 2008年
18. 吉田寛著『絶対音楽の美学と分裂する〈ドイツ〉』十九世紀 青弓社 2015年
19. 聖書 新共同訳 日本聖書協会
20. 川端純四郎著『さんびかものがたり I』日本キリスト教団出版局 2009年
21. 同上『さんびかものがたり V』日本キリスト教団出版局 2011年